むかしの高松

2013年3月
第26号

萩前(はぎのまえ)・一本木(いっぽんぎ)遺跡

調査区全景(上が北)

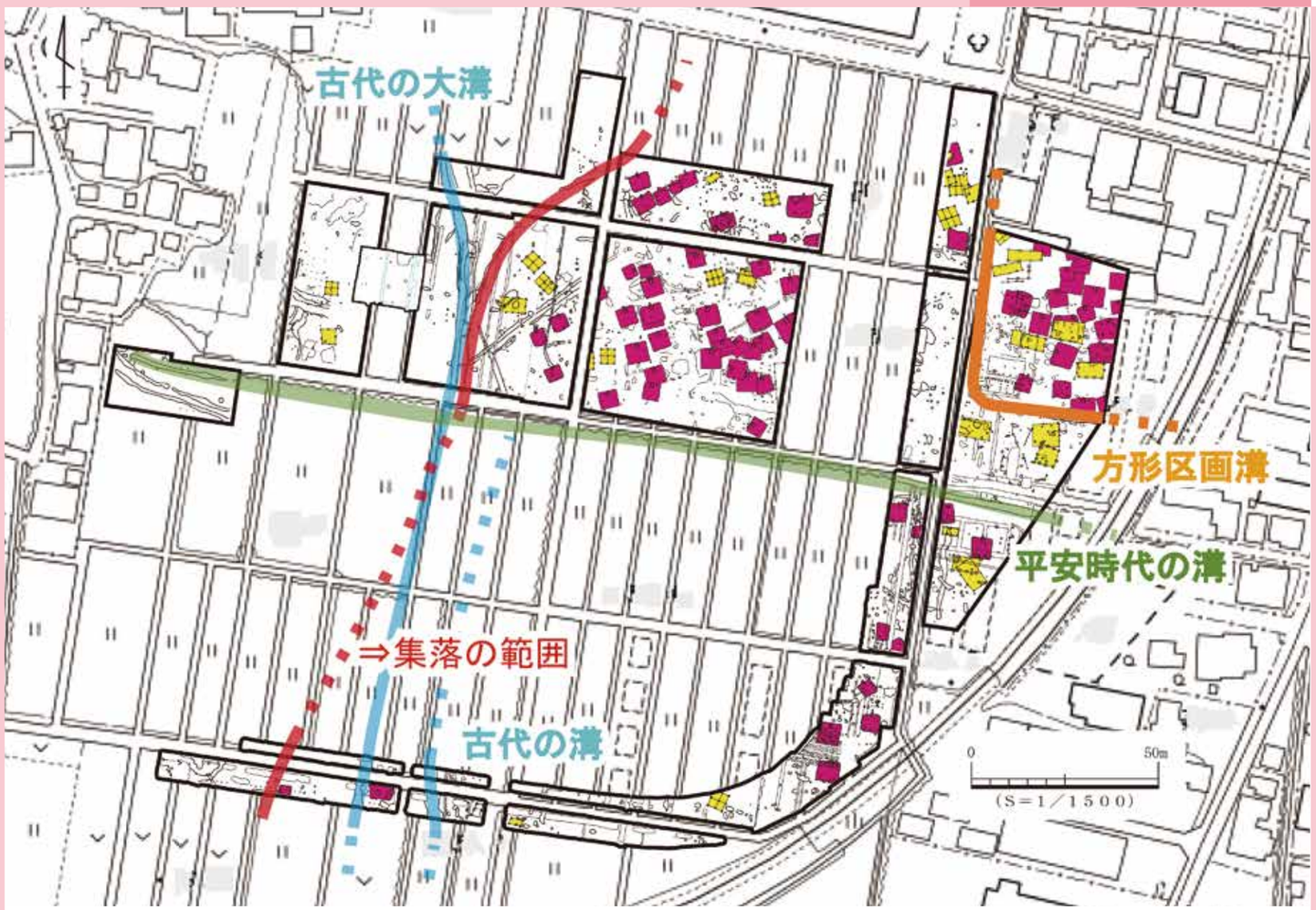
高松平野における古墳時代の大集落

古代の大溝

幅約1.5～3.0m，深さ約1.0～1.5mの大溝を検出しました。この溝はこの周辺地域の基幹水路である可能性があります。下層から出土した遺物の年代から，飛鳥時代（７世紀中ごろ・古代山城屋嶋城が築かれた時期）の溝と考えられます。

首長居館を囲むと想定される方形区画溝

南西コーナーを確認しました。南辺30m以上，西辺20m以上，幅約2m，深さ約1.7mの大規模なものです。V字型に掘削され，土層の観察から，複数回の掘り直しの痕跡が判明しました。



萩前・一本木遺跡のあらまし

萩前・一本木遺跡は，高松平野南部の仏生山町に所在し，新病院整備事業等に伴い発掘調査を行いました。今回の調査範囲の約100m北側には，高松平野を横断する旧南海道跡（古代の幹線道路）があります。

調査の結果，古墳時代中期～奈良時代にかけての大規模な集落が広がっていたことが明らかになりました。遺跡からは，竪穴建物約80棟，掘立柱建物約33棟，溝，土坑などを確認しました。住まいである竪穴建物は，方形に地面を掘りくぼめ，4本の柱で上屋を支える構造で，北もしくは西壁にカマドが造られていました。内部には，須恵器や土師器の土器，鉄器や石製品など，当時の生活道具が残されていました。向きが少しずつ異なる建物跡が重複して確認できたことから，建替えをしながら長い間この地で生活を営んだ様子がわかりました。出土した遺物の年代から，今から約1400～1500年前の古墳時代中期～後期のものであると考えられます。

また今回の調査では，古墳時代後期の首長居館跡を香川県下で初めて確認しました。居館跡は溝によって一般の建物とは区画されていました。溝は幅約2.0m，深さ約1.4～1.7mでV字型に掘削されており，多くの人々が掘削にあたったと考えられます。また区画溝としての役割のほか，深く掘削されていることから防御的な機能ももっていたと思われます。溝は調査区外へさらに続いていることから，今後，首長が住んだ建物等が発見される可能性が考えられます。

竪穴建物跡

竪穴建物の大きさは，一辺約4.0～6.3m（約5～12坪）の規模を測ります。造りつけのカマド，柱穴，貯蔵穴など建物に伴う設備が見つかりました。

掘立柱建物跡

梁行2間×桁行3間の総柱建物で，総床面積は約30㎡（約9坪）ほどの広さです 。

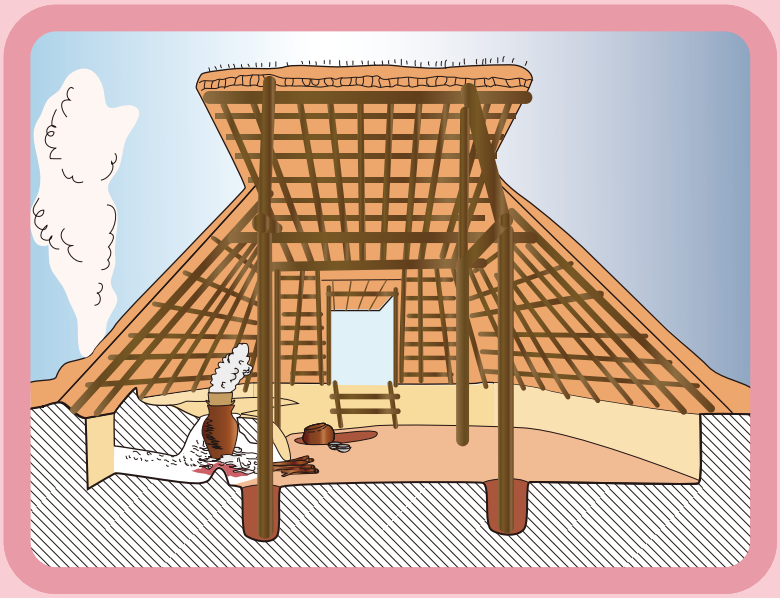
須恵器

竪穴建物などから，土師器と呼ばれる素焼きの土器とともに，古墳時代に朝鮮半島から製作技術が伝えられた須恵器と呼ばれる窯焼きの土器が大量に出土しました。

カマドつき住居

古墳時代の後半には，住居にカマドが造られるようになりました。カマドには屋外に煙を出すための煙道（えんどう）を土中に開けることで，排気機能もあったようです。カマドはそれまでに使われてきた炉に比べて熱効率が高く，少ない燃料で煮炊きをすることができるようになりました。カマドに甕（かめ）をかけて水を沸騰（ふっとう）させ，その上にこしきと呼ばれる底に穴の開いた土器を置いて煮炊きをしていました。

萩前・一本木遺跡の竪穴建物にはカマドが数多く残っており，カマドの内側には赤く焼けた土や炭化物，カマドにかける土器を下から支えるための支脚が残されていました。須恵器の高杯（たかつき）が逆さまに置かれたカマドもあり，使わなくなった時に何らかの儀式をしていたのかもしれません。



編集後記

調査中，ならびに3回の現地説明会などでは，多くの方々のご参加をいただき，調査を無事に終えることができました。改めて皆様に感謝いたします。

萩前・一本木遺跡の発掘調査によって，古墳時代における集落の貴重な資料や知見を多く得ることができました。今後，調査成果を詳細に検討し，整理作業を行っていく予定です。

現地説明会の1コマ

むかしの高松

第26号　2013年3月

編集発行
高松市教育委員会　埋蔵文化財センター
高松市番町一丁目5番1号
tel 087-823-2714
http://www.city.takamatsu.kagawa.jp//886.html